フリードマンのマーケット・メカニズムについて

吉　野　正　和

目　次

1．はじめに
2．フリードマンのマーケット・メカニズム
3．アダム・スミスの後継者
4．自由主義は社会主義に勝ったのか
5．不 平 等
6．差　　別
7．大 恐 慌
8．批　　判
9．日本の場合
10．マーケット・メカニズムと貨幣数量説
11．むすびにかえて

1．はじめに

1989年のベルリンの壁の崩壊，1991年のソ連の解体，東欧と中国の市場経済化によって，資本主義 対 社会主義の対立は終わったようである。マネタリストの総帥であるミルトン・フリードマンは，早くから，マーケット・メカニズムを重視している資本主義経済を擁護していた。なぜ，マーケット・メカニズムを利用した資本主義が勝ったのか。この論文では，フリードマンの考えているマーケット・メカニズム[1)]について研究する。

注1）マーケット・メカニズムと関連している用語，あるいは，同義語は，非常に，
（次頁脚注へ続く）

2．フリードマンのマーケット・メカニズム

「見えざる手」の資本主義経済か，計画経済の社会主義経済か，どちらが優れているのか。フリードマンは「見えざる手」の資本主義経済の方が優れていると考えている。前述したが，1989年のベルリンの壁の崩壊や1991年のソ連の解体等でわかるように，計画経済の国は繁栄せず，消滅してしまっている。これらの最近の経済的な大事件はフリードマンの理論が正しかったという証明の一部になるであろう。もちろん，フリードマンはこの主張を，つい，数年前から，しているのではない。ずっと，以前から，フリードマンはこの主張をし続けていた。1962年に，フリードマンは，『資本主義と自由』を書いているが，この本の中で，フリードマンは「見えざる手」のマーケット・メカニズムを主張している。また，もちろん，ベスト・セラーとなったフリードマンの『選択の自由』においても，マーケット・メカニズムの重要性を主張している。

フリードマンは，『選択の自由』（［3］訳書 pp. 94－105）において，日本とインドを比較している。1867年の明治維新以後の30年間の日本と1947年の独立を達成した後の30年間のインドの比較をしている。80年間の時間のズレがあるが，当時の日本とインドは似た環境下にあった。たとえば，日本も，インドも，「古い文明」をもっていた。また，両国とも，高度に発達した文化をもっていた。また，両国とも，身分制度をもっていた。インドは「カースト制度」であり，日本は「士・農・工・商」であった。そして，日本も，インドも，一大政治変革があった。そして，有能な指導者たちが出現した。当時の日本とインドを比較すると，インドの方が有利であった。たとえば，

たくさんある。たとえば，価格機構，プライス・メカニズム，市場機構，市場制度，市場システム，市場経済システム，市場メカニズム，自由競争原理，自由主義経済，市場経済，競争原理，自由な経済活動，競争市場，自由経済，資本主義経済，自由市場機構，市場経済機構，市場原理，新保守主義，新自由主義，である。

日本は鎖国をしていて世界から孤立していたし，外の世界に関して無知であり，科学や技術の面で西欧諸国よりもはるかに遅れていた。また，日本人は，中国語とオランダ語を除けば，どんな外国語も読めないし，話せなかった。それに対して，インドは，日本よりも，はるかに，幸運であった。インドは，第一次大戦前に，すでに，大きな経済成長をしていた。イギリスの支配が終わったときに，すでに，高度に訓練された高い技術をもった官僚や近代的な工場や鉄道網がインドに残っていた。インドの指導者たちの多くは，イギリスで教育を受けていた。インドの方が日本よりも，はるかに有利であった。

しかし，インド経済は発展しなかった。日本経済は発展した。なぜか。それは経済制度の相違である。日本はマーケット・メカニズムが働く自由市場に依存したのに対して，インドは中央集権的計画経済に依存してしまった。以上がフリードマンの『選択の自由』（[3] 訳書 pp. 94－105）の要旨である。それでは，なぜ，マーケット・メカニズムが働く自由市場に依存すると，経済が発展するのか。マーケット・メカニズムには3つの機能がある。それらは，①情報伝達，②誘因提供，③所得分配，である。①情報伝達については，価格体系が存在すると，情報が与えられるということである。価格体系の情報は，素早く，効率的で，安く，与えられる。②誘因提供というのは，価格体系が存在すると，何をどうやって，仕入れて，どのような生産方法を採用すれば，採算が合うから，やれるということを教えてくれるということである。③所得分配については，価格体系が存在すると，いくらの賃金で仕事をするか，あるいは，労働者を雇うか，ということを教えてくれることになる。しかも，この3つの機能は，相互に，密接に関連している。なぜなら，価格体系が存在すると，この3つの機能は，いつも，同時に，機能するからである。

また，フリードマンは，マーケット・メカニズムがないところで，経済が繁栄し，自由が達成されるのを，人類の歴史上，知らないと主張している。「それにしても，自発的な交換が支配的な組織原理ではなかったというのに，

経済的な繁栄も人びとの自由も達成するのに成功したという社会を，人類の歴史上でわれわれはひとつも知らない」（フリードマン［3］訳書 p. 17)。

3．アダム・スミスの後継者

フリードマンはアダム・スミスの後継者である。アダム・スミスの自由主義思想は「レッセ・フェール」とか「自由放任主義」という言葉でいわれている。「自由放任主義」というと，一見，「無政府主義」を意味するように考えられがちであるが，アダム・スミスは政府の仕事を認めている。フリードマンも，政府の仕事を認めている。フリードマンは『選択の自由』（［3］訳書 pp. 46－47）において，アダム・スミスの『国富論』を引用している。フリードマンは政府の仕事として，3つの政府の仕事を引き継いでいる。その3つとは，①国防，②司法・行政，③公共事業，である。アダム・スミスの3つの政府の仕事に加えて，フリードマンは，第4の政府の仕事を追加している。それは，「責任を果たすことができない個人」（たとえば，子供，精神病患者等）の保護である。この4つの政府の仕事は，マーケット・メカニズムではどうにもならない。したがって，政府にやってもらわなければならない，とフリードマンは考えている。したがって，フリードマンは，スミスから，①国防，②司法・行政，③公共事業，の政府の仕事を学び，④「責任を果たすことができない個人」の保護，を追加している。④が加わっているが，本質的には，スミスの考え方を受け継いでいるといえよう。政府の仕事は，法と秩序の維持であり，ゲームにおける審判の仕事である，とスミスとフリードマンは考えている。したがって，自由主義思想において，スミスとフリードマンは，ほとんど，同じであるといえよう。

4．自由主義は社会主義に勝ったのか

自由主義は社会主義に勝ったといえよう。長い間，自由主義と社会主義は

対立してきた。お互いに，経済がより発展すると思っていたのであった。1989年のベルリンの壁の崩壊や1991年のソ連の解体によって，ほぼ，勝負がついたといえよう[2)]。リーダーのソ連だけでなく，東欧の諸国も社会主義を見限り，市場経済化を目指しているのである。龍谷大学の藤永安雄教授は以下のように述べている。

「1989年の東欧の大変動と91年のソ連の解体によって社会主義体制は政治

2）早稲田大学の東條隆進教授も以下のように述べている。「1991年の社会主義国ソ連邦の解体は資本主義体制を超克する目的で建設された社会主義の実験が挫折したことを意味した。

それでは，このことが新古典派経済学の勝利を意味するであろうか。たしかに市場の価格機構なしには経済は合理的に運営され得ないと主張した点でアダム・スミス以来の古典派経済学・新古典派経済学の伝統の勝利であったと言えよう」（東條［13］p. 73）。

また，滋賀大学の福田敏浩先生も以下のように述べている。

「西ドイツによる東ドイツの吸収合併によって，たしかに思想的には，エアハルト著の『万人のための福祉』が『マルクス・エンゲルス全集』に勝った，と言えるかもしれない」（福田［7］p. 278）。

また，東京大学教養学部の杉浦克己教授も以下のように述べている。

「社会主義の実験は失敗した。ソ連という近代国家も崩壊し，共産党は権力の座を追われた。この基本的原因は，公的所有制度に基づく計画経済体制が，アメリカとの冷戦を遂行しつつ，国民の経済的要求を満たすのに失敗したことを示している。これまでにもソ連経済には，共産党を中心とする権力的な抑圧の体制があり，労働組合も労働者大衆から遊離して，大衆が無権力，無権利状態に陥っているため，労働意欲が低下してしまうと問題にされてきた。そのうえ，計画経済自体に起因して無駄な在庫が増大するなど，経済体制も非効率なものとなった。経済政治制度自体が権力の座に安住した共産党を堕落させ，抑圧され支配された人民の恨みを蓄積した。制度は決定的に硬直化してしまっているのに，日々改善され共産主義の理想社会が実現されつつあるとの虚偽がまかり通って，人民はその幻想を幻想と知りつつ従わざるをえなかっったのである。だから権力は実にもろく瓦解した。

ソ連の社会主義は決してすべての社会主義実験を試みたものではないし，むしろ偽の社会主義の試みであったといってよい。しかしその失敗はプロレタリア独裁そのもの，さらに全面的な国有化と計画経済そのものの不可能なことを示している。いわゆるブルジョア的な自由と民主主義そして市場は不可避であることを確かにした。これまでのところ，ソ連の崩壊と東欧革命は，事実上資本主義への革命をもたらしたといえよう。中国は社会主義市場経済を唱えているが，金銭崇拝が蔓延してしまって，まさに最もどぎつい資本主義化への道を進んでいる」（杉浦［12］pp. 224－225）。

的にも経済的にも完全に敗北したといわざるをえない。では一体どうしてこういう事態を招いたのか，現在多くのマルクス主義者は沈黙ないし茫然自失の状態である。いろいろさまざま議論はあるにしてもいまだに出口を見出せない状態である」(藤永［6］p. 162)。

藤永教授によると，社会主義体制は政治的にも経済的にも完全に敗北したのである。また，マルクス経済学者は沈黙しているか，あるいは，茫然自失の状態であるらしいし，出口を見出せない状態であるらしい。したがって，現時点（1995年）において，自由主義は社会主義に勝ったといえよう。また，今後，社会主義を目指す国は，おそらく，ないであろう。

5．不 平 等

たとえ，自由主義が社会主義に勝ったとしても，マーケット・メカニズムでは，貧富の差が，ますます，開き，不平等が，ますます，助長される，とマーケット・メカニズムはよく批判されている。したがって，マーケット・メカニズムは人間的な暖かさがなく，非人格性がある，とよく批判されている。ある人は事業に大成功して，大金持ちになり，ある人は事業に失敗して，1円もなくなってしまう人もいる。マーケット・メカニズムは貧富の差をつくり出すだけであるという批判である。また，資本主義経済は富裕な者が貧困者を搾取する体制である，ともいわれている。これに対して，フリードマンは，ソ連，中国，インドのような計画経済の国にも「貧富の差」が存在していて，しかも，計画経済の国の「貧富の差」の方が，資本主義の「貧富の差」よりも大きい，と主張している。そして，資本主義の発展が「貧富の差」を縮小してきた，とフリードマンは考えている[3)]。たしか，7～8年位前の

3）フリードマンは以下のように述べている。「資本主義がこれに代わる組織体制よりも不平等を少なくし，資本主義の発展は不平等の程度を大いに縮小してきたということである。場所と時間のどちらを通じて比較してみても，この見解はひとしく確認される。スカンジナビア諸国，フランス，英国および米国のような西

（次頁脚注へ続く）

アンケートで，日本人は「中流意識」を持っている人が大部分であったようである。経済が発達した国の方が，「貧富の差」は，少ないといえよう。

そもそも，計画経済の社会主義諸国は「平等」をひとつの目標にしていたのであるが，結果として，経済は発展せず，貧富の差は，ますます，拡大し，ますます，不平等な国になってしまった。これは偶然ではない。そもそも，「平等」という言葉には，ふたつの意味がある。ひとつは「結果の平等」であり，もうひとつは「機会の平等」である。社会主義の目指した平等は「結果の平等」である。「結果の平等」は自由とも両立しない。

フリードマンは以下のように述べている。「いまやすべての人びとが，生活や所得で同一水準にならなければならないとか，競争の決勝点において同一線上に並ぶようにしなければならない，というのだ。このような『結果の平等』は，明らかに自由と衝突する。この『結果の平等』を推進しようとする人びとの努力こそが，政府をいっそう巨大化させたり，政府による自由への制限を生み出す主要な源泉となったりしてきたのだ」（フリードマン［3］

洋の資本主義社会では，インドのような身分社会とかエジプトのような後進国においてよりも，不平等が格段に小さいことは確かである。ロシアのような共産主義諸国との比較は，証拠資料が少なくて信頼性も低いのでいっそう困難である。しかし，特権階級とその他の階級との生活水準の格差によって不平等を測定するならば，このような不平等は資本主義諸国のほうが共産主義諸国においてよりも決定的に小さいということは十分にありうる」（フリードマン［2］訳書 p. 190）。

「過去一世紀において，自由市場資本主義は，このような不平等を増大させ，富裕な者が貧困者を搾取する体制だとする神話が広がってきた。

これほど真理から遠い考え方はない。自由市場の運営を許されているところや，『機会の平等』へと近づいていくことが許されているところではどこでも，通常の人々がかつては夢みることさえできなかったような生活水準を，次から次へと達成することができてきている。自由市場の運営を許されていない社会はどの社会でも，富裕な人と貧困な人との格差が増大していき，富裕な人はよりいっそう富裕となり，貧困な人はより貧困となってきている。このことは，相続した社会的身分が社会的立場を決定していく中世紀のヨーロッパや独立以前のインド，現代の南アメリカにおける諸国家のように，封建社会において真実だ。政府にとり入ることができるかどうかが社会的立場を決定する今日のソ連，中国，インドのような，中央集権的に計画されてきた社会においても，まさにこのことが発生している。これらの三国のように，平等の名において中央集権的計画が導入された国では，このような状態が必ず起きている」（フリードマン［3］訳書 p. 234）。

訳書 p. 206)。

競争の決勝点で同じところにいるというのは「結果の平等」であり，実際，もっと，能力がある人は「なんらかの命令」によって全力を出しきる自由を奪われていることになる。「結果の平等」と自由は，明らかに，矛盾することになる。フリードマンの主張している平等は「機会の平等」である。フリードマンは以下のように述べている。「平等とは，『機会の平等』を意味するようになってきた。すなわち，すべての人は，目的を追求していくにあたって，自分自身の能力を使用するのに，どんな恣意的な障害によっても妨げられることがあってはならない，という意味での『機会の平等』だ。今日でもこの意味での平等が，アメリカの大半の市民たちにとって，平等が何を意味するかに対する支配的な考えだ」(フリードマン［3］訳書 pp. 205－206)。

そもそも，人間の能力は1人1人が，皆，違っている。したがって，競争をしたときに，様々な結果になるのが当然のことである。それを同じ結果にするためには，命令とか規制が必要になり，自由が制限されることになってしまう。したがって，「平等」という場合，「結果の平等」でなくて，「機会の平等」を考えなくてはならない。下の者が上に追いつく自由もあれば，上の者が下の者に追いつかれる自由もあるのが，「機会の平等」である。このように，マーケット・メカニズムには社会的な移動性があるのである。日本の江戸時代のように，「士・農・工・商」という身分制度があった時代では，いかに，能力があっても，その能力を発揮する自由がなかったわけである。このように，マーケット・メカニズムは多様性と自由を含んでいる。

6．差　別

「5．不平等」で貧富の差はマーケット・メカニズムで，縮小させていると述べたが，「差別」については，どうであろうか。「差別」についても，資本主義の発展は差別の程度を弱めている，とフリードマンは考えている。た

とえば，八百屋に行って，トマトを買う場合，誰がトマトを育てたかは問題でなくなる。日本人なのか，中国人なのか，黒人なのか，白人なのか，クリスチャンなのか，ユダヤ教信者なのか，仏教徒なのか，共産党員なのか，民主党員なのか，ということが問題でなくなる。マーケット・メカニズムのすばらしいことは，お互いに，名前も知らない人々が協力しあうことである，とフリードマンは考えている[4)]。また，ある商品が，特定の宗教とか，特定の人種によってつくられたのがわかった場合，マーケット・メカニズムを無視して拒否する自由もあるが，もし，そうすると，確実に，その人が損をすることにもなるのである。フリードマンは以下のように述べている。

「特定の宗教的・人種的・社会的集団の経済活動の上での特殊なハンディキャップ，すなわち，いわゆる不当な差別が，資本主義の発展とともに大幅に縮小してきたことは一つの目ざましい歴史的事実である。身分制度を契約制度に取り換えたことが，中世の農奴を解放する第一歩であった。中世を通じてユダヤ人たちが生き残ることができたのは，公式の迫害にもかかわらず，彼らが活動し自活することを可能にさせた市場部門が存在したからである」（フリードマン［2］訳書 p. 123）。

4）フリードマンは以下のように述べている。

「競争的資本主義と差別の問題ですが，こんなことを考えましょう。かりに，カリフォルニア州の農場が国有化され，社会主義体制のもと，政府によって運営されているとします。その経営をだれにやらせ，だれを雇うかは，当然に政府の役人が決めます。そこにはまず間違いなく差別の要素が入ってきます。それは日系人を締め出す差別かもしれませんし，逆に日系人を進んで雇おうということかもしれませんが，いずれにしてもなんらかの主観的な決定がされることは避けられません。

ところが，自由市場組織で運営されている場合は全く違います。私が八百屋へ行ってトマトを買う。そのトマトを育てたのは，日系人か中国系人か黒人か，クリスチャンかユダヤ教信者か仏教徒か，共産党員か民主党員か共和党か……などということは，これっぽっちも意識しません。

自由市場機構がすばらしいのは，おたがいに顔も名前も知らない人びとが，おのずから協同する，という状態をつくり出す点にあります。トマトを育てた人は，私が買うとは知らずに，私に協力してくれているのですからね」（フリードマン［10］p. 30）。

7. 大恐慌

「見えざる手」のマーケット・メカニズムを利用する資本主義経済は内部矛盾があり，大恐慌となり，結局，自滅するしかない，とよくいわれている。この考え方はマルクス経済学者がよく考えている理論であるが，しばしば，ケインジアンの立場に立つ経済学者もこの考え方をしている。ケインジアンの立場に立つ経済学者は，大恐慌にならないために，政府の財政政策を強く主張している。資本主義経済の内部矛盾のために大恐慌になり，結局，資本主義経済が自滅する，とフリードマンは考えていない。そもそも，内部矛盾のために自滅したのは計画経済の諸国であった。もちろん，これは単なる結果論である。そこで，最もよく知られている1929年から始まった大恐慌について，フリードマンの考え方を述べよう。1929年から始まった大恐慌は米国の中央銀行である連邦準備銀行の金融政策の失敗であった，とフリードマンは考えている。貨幣量が減少して，1929年10月24日（暗黒の木曜日）に株式が大暴落したわけであるが，1929年10月に，大規模で拡張的な金融政策は行われなかった。大規模で拡張的な金融政策が行われたのは1932年４月のことであった。1929年から1932年４月までの間，連邦準備銀行は，ほとんど，無能な中央銀行であった。貨幣量が減少して，経済が不況になっているデフレ状態と考えられた1931年10月に，ニューヨーク連邦準備銀行は公定歩合を1.5%から，3.5%へと引き上げるという誤った金融政策を行っていた。このような中央銀行の金融政策の失敗で，大恐慌になってしまったわけである。いつの時代でも，貨幣量を減らす政策を採用して，貨幣量が減少すれば，不況になるのは当然の話であって，フリードマンの貨幣数量説の否定ではなくて，悲劇的な貨幣数量説の証明であった。したがって，貨幣量の減少を放置していた中央銀行の金融政策の失敗が大恐慌の原因である，とフリードマンは考えている。したがって，1929年からの大恐慌は資本主義経済の内部矛盾でなく，「市場の失敗」でもない。前述したが，マルクス経済学者は

「みえざる手」のマーケット・メカニズムの資本主義経済は，かならず，自滅すると信じているようである。たとえば，立命館大学の甲賀光秀教授は以下のように述べている。

「第一次大戦後の革命的情勢をきりぬけた独占資本主義諸国は，『相対的安定期』をむかえたが，1929年にはふたたび世界資本主義をまきこむ世界大恐慌を勃発させた。……独占資本が支配するもとでは，資本主義的な市場のメカニズムにのみゆだねていたのでは，資本制社会の維持・再生産は不可能となった」(甲賀［9］pp. 211－212)。

また，関西学院大学の小西唯雄先生も以下のように述べている。

「一方，市場経済は，競争による重複・ムダを生じるし，また『無政府的生産』によって恐慌・失業をくり返し，ついには破滅せざるをえないということになる。いま，これらについて詳説する余裕はないが，このような筋書は，まことに明快かつ『論理的』であって，多くの人々が『社会主義の勝利』を確信したのも，十分に首肯できるところがある」(小西［8］pp. 2－3)。

1929年から始まる大恐慌の解釈は，経済学の流派によって相違があるが，あの大恐慌が資本主義経済の内部矛盾と解釈するのは正しくないであろう。

8．批　　判

フリードマンのマーケット・メカニズム擁護の理論には様々な批判がある。たとえば，立命館大学の山口正之教授は以下のように述べている。「消費者の欲求は，企業の宣伝広告によって操作されつくりだされるものだというガルブレイスの『依存効果』の主張などは頭から黙殺する」(山口［14］p. 119)。消費者は企業の宣伝広告によって大きく影響されるはずなのに，フリードマンは，ガルブレイスの依存効果を全く無視していると批判されている。フリードマンはガルブレイスの依存効果について以下のように述べている。「したがって，広告などの自由競争が行なわれている世界では，広告はそれによって欲望をつくるというよりも，人々の欲しているものを見いだ

す過程のものだと思います。……

なんらかの変化もない完全に静的な世界においては，広告はムダであることは確かでしょうが，新製品，新たな供給者などの登場する動態的変化の摩擦を伴う現実の世界においては，広告が情報の拡散のために必要なのです」(フリードマン［4］pp. 74－75)。フリードマンは，宣伝の効果がある場合もあるし，ない場合もあると考えている。宣伝はひとつの過程であり，良い商品ならば，売れるであろうし，悪い商品ならば，売れないと考えていて，全く無視しているというわけではない。

また，よく，マーケット・メカニズムは，非人格的で，人間味がない，と批判されている[5]。「6．差別」の注4）で，フリードマンを引用したが，人でなくて，価格の方が差別が少なくなるし，かえって，価格の方が人間味が出るのである。また，マーケット・メカニズムを利用している資本主義経済は経済が発展し，貧富の差の程度が縮小し，福祉も充実してくるので，人間味も増加しているといえよう[6]。

9．日本の場合

日本は，明治時代以後，資本主義国であるので，マーケット・メカニズムを利用して，経済的には発展してきた。しかし，最近，よくいわれている「行政改革」・「規制緩和」・「小さな政府」等を考えてみると，政府が大きくなり過ぎていると考えられる。裏返していうと，民間部門が，それだけ，小

5）広島経済大学の吉澤昌恭先生は以下のように述べている。「市場機構には尚人々の不満の種となる特質が存在する。即ち，それは人間性を欠いた，全くの非人格的な機構なのである（吉澤［15］p. 73)。

6）バトラーは以下のように述べている。

「フリードマンは，市場制度が，何よりも早く物理的財の価値を引き上げ同時に選択をも促進し，多様性に拍車をかけ，社会的に恵まれない人々の福祉を充実しまた同時に我々が，物質的繁栄と同様に重要だとみなしている他の非経済的な物の価値をも引き上げるすばらしい能力を有すると説いたが，これはフリードマンにとって単なる理論上の推測ではなく，経験に基づいた事実であった」（バトラー［1］訳書 p. 252)。

さくなっていることになる。本来，マーケット・メカニズムが働いている市場においては，価格は需要と供給によって決定されるのであるが，政府や都道府県の命令によって決定されているものが多い。この点を考えてみると，将来の日本経済がどうなるか心配でもある。一応，日本は資本主義の国となっているのではあるが，かつての国鉄のように，国によって経営されていたものは効率が悪かった[7]。日本のコメは国によって管理されてきたので，旧ソ連の計画経済と同じように，効率が悪くなってきている。したがって，すぐに，とはいわないが，理想的には，10年位で，自由化すべきであるが，なかなか，そのようになりそうもない。

現在（1995年）の日本経済は，バブル経済の反動で，平成不況になり，やや，回復に向かっているようであるが，これは貨幣の問題である。バブル期には，貨幣量は10％以上で増加していたし，平成不況期には，貨幣量は０％近くまで，増加率は低下してしまっていた。貨幣量の変化が激しいときは，マーケット・メカニズムが機能しにくくなるので，中央銀行である日銀は貨幣の変化を少なくし，フリードマンの主張しているＸ％ルールを行うべきであろう。

10. マーケット・メカニズムと貨幣数量説

フリードマンの経済学には２本柱がある。ひとつは「見えざる手」のマーケット・メカニズムの自由主義思想であり，もうひとつは貨幣数量説である。マーケット・メカニズムが働いている資本主義経済は繁栄するはずであるが，貨幣面における安定性がないと，マーケット・メカニズムが働きにく

7）J. R. になる20年以上も前に，フリードマンは，日本の国鉄について，以下のように述べていた。
「日本の経済については，十分に知りませんが，しかし，私は何故政府によってなされるのかその理由の分らない一つの大きな公共的事業を知っています。私は，現在公共の基金から補助を受けている鉄道のことについて言及しているのです」（フリードマン［5］p. 72）。

くなってしまう。この2本柱は根っこでつながっている。したがって，フリードマンは貨幣を安定的に供給するX％ルールを主張しているのである[8)]。

11. むすびにかえて

1989年のベルリンの壁の崩壊や1991年のソ連の解体や東欧の市場経済化は歴史的な大事件であるが，フリードマンはこれらの社会主義諸国の末路を知っていたようである。自由主義経済に対抗している計画経済では，自由も少なくなるし，経済も発展しない，とフリードマンは主張し続けてきた。1962年の『資本主義と自由』や1979年の『選択の自由』を読めば，社会主義諸国の崩壊を予測しているようであるのがわかる。「7．大恐慌」で述べたが，フリードマンは大恐慌の分析もしている。大恐慌の原因は，「市場の失敗」ではなくて，「政策の失敗」である，としている。大恐慌も歴史的な大事件であるが，フリードマンは大恐慌の原因を分析し，かつ，資本主義経済と計画経済を分析し，資本主義経済の方が発展しやすいという結論を出していた。計画経済では，経済がよくないので，福祉も十分でなく，貧富の差も縮小しない。計画経済の社会主義体制は「平等」と「効率」の名の下に，多くの人々を引き付けてきたが，「平等」と「効率」は幻想でしかなかった。

反対に，マーケット・メカニズムを利用する資本主義諸国は経済が発展し，貧富の差が縮小し，差別も少なくなっている。もっとも，差別は，現在もあるが，今後も，なくならないであろうが，程度は，より少なくなってい

8）立教大学の西山千明教授は以下のように述べている。
「マネタリズムが主張する通貨供給率の適正化は，マーケット・メカニズムが順調に働くために不可欠な条件の一つである。たとえば，昭和48年以降の『大インフレ』の過程において，マーケット・メカニズムがどんなに歪んでしまったかは，詳しく説くまでもないことと思う。通貨供給増加率がその適正値から大きく逸脱した結果，狂乱物価が発生し，その結果明らかに所得の分配面において不公正が発生し，資源の最適配分は失われ，労働と資源はインフレ利潤のある部分へと流れていき，マーケット・メカニズムの効率も大きく減退した。賃金を含めて相対価格体系が，大きく歪んでしまったことはいうまでもない」（西山［11］p. 59）。

くであろう。フリードマンは，マーケット・メカニズムを利用して，底辺の人々に焦点を合わせ，底辺の人々の生活を豊かにしようとしている，庶民（消費者）の味方なのである。そもそも，プライス・メカニズムで，生産者でなくて，消費者に決定権を与えているのである。

フリードマンのマーケット・メカニズムの分析は範囲が広く，とても，すべてをカバーできない。マーケット・メカニズムと「自由」との関係は切っても切れない関係であるが，この論文では「機会の平等」と「結果の平等」という点で，ちょっと，触れたに過ぎない。また，マーケット・メカニズムにおいて，「負の所得税」や「最低賃金法への反対」や「授業料クーポン制」や「変動相場制」や「小さな政府」の主張がある。また，医者や弁護士の免許制度の廃止の主張もある。一見，過激発言のように思えるが，よく考えると，納得させられてしまう。フリードマンの思想には，常に，個人の自由を大事にする考え方が流れている。今後，日本経済は，「行政改革」，「規制緩和」，「小さな政府」ということが重要視されるであろう。フリードマンのマーケット・メカニズムを利用した自由主義思想は日本経済に役立つことは疑いがないであろう。

参　考　文　献

[1] Butler, E., *Milton Friedman: A Guide to his economic thought*, Gower publishing Company Limited, 1985. 宮川重義訳『フリードマンの経済学と思想』（多賀出版，1989年10月）。

[2] Friedman, M., *Capitarism and Freedom*, The University of Chicago Press, 1962. 熊谷尚夫・西山千明・白井孝昌訳『資本主義と自由』（マグロウヒル好学社，1975年11月）。

[3] Friedman, M. and Friedman, R., *Free to choose —— A Personal Statement*, 1979. 西山千明訳 『選択の自由——自立社会への挑戦』（日本経済新聞社，1980年5月）。

[4] ミルトン・フリードマン・安井琢磨・館竜一郎・藤野正三郎・藤田晴「金融・財政の効果と限界」『週刊 東洋経済』臨時増刊 第3308号，1966年9月27日。

[5] ミルトン・フリードマン・大来佐武郎「日本経済はインフレへの道」『経済往来』第15巻第8号，1963年8月1日。

[6] 藤永安雄「資本主義は勝利したか，マルクス主義は不毛か——走り書き的覚え

書き――」龍谷大学『経済学論集』第33巻第１号，1993年６月。
［７］福田敏浩「新自由主義と社会的市場経済」滋賀大学『彦根論叢』第285・286号，1993年11月。
［８］小西唯雄「市場経済体制と競争政策」関西学院大学『経済学論究』第47巻第４号，1994年１月。
［９］甲賀光秀「新自由主義思想の時代錯誤性と反動性」『経済』第217号，1982年５月１日発行。
［10］西山千明編『フリードマンの思想』（東京新聞出版局，1979年６月）。
［11］西山千明『マネタリズム――通貨と日本経済』（東洋経済新報社，1976年８月）。
［12］杉浦克己「市場と国家」山口重克編『市場経済――歴史・思想・現状』（名古屋大学出版会，1994年４月20日）。
［13］東條隆進「市場経済と秩序政策（一）」早稲田大学『早稲田社会科学研究』第46号・『早稲田人文自然科学研究』第43号合併号，1993年３月。
［14］山口正之「フリードマンの『選択の自由』と独占資本主義」『経済』第196号，1980年８月号。
［15］吉澤昌恭「新自由主義（２）」広島経済大学『経済研究論集』第５巻第３号，1982年８月。